



## ハンガーホール出演者への御案内

本紙は、ステージ出演・演奏初心者の方向けの、ステージリハーサルから演奏本番までの流れ・内容の説明となっております。ハンガーホールに限らず、他のライブハウスなどに出演される際にも、共通する内容となっておりますので、ご一読の上、ご理解いただけたらと思います。

何より、分からない事は積極的に聞いて下さい。「そんな事も知らない?」という事は絶対にありません。少しでも不安を取り除くことが、リラックスした良い演奏にもつながります。時々、分からない用語が使われた時も「それってナンですか?どういう意味ですか?」と気軽に言ってください。

### ■ステージリハーサルとは

ステージリハーサルは、「リハーサル」と呼ばれているので「本番直前の最終練習」と思われがちですが、本来の目的は「**演奏で鳴らす音量・音質の確認(サウンドチェック)**」を行います。これは、演奏者のためのものでもあり、同時に PA オペレーター(音響担当)にとっても、重要な確認になりますので、双方でコミュニケーションを取りながら行う必要があります。

サウンドチェックの中では、大きく分けて**3つの音の確認・音作り**を行います。

#### ①各演奏者の楽器その物の音質や、アンプ出力音量の確認。

スタジオや自宅などで、作ってきた音の復元を行ってください。鳴らす環境が違くと、違って聴こえることもあります。イメージを思い描きながら、楽器やエフェクターの調整をして下さい。

#### ②モニタースピーカーの確認(※ステージリハーサルの最重要項目です。)

足元に置いてあるフロアスピーカー、またはポールに立ててあるスタンドスピーカーは、演奏者が、演奏している各々の音を聴くための**モニタースピーカー**です。この音の調整が、演奏の出来を左右します。(別紙にて、細かく説明いたします。)

#### ③お客さんに聞かせる音の調整

これについては、ほとんど PA オペレーターの仕事です。楽器の音量やモニタースピーカーが整ったところで、メインスピーカーの音の調整をします。

**1曲丸々演奏する方もいますが、そのような事はオススメしません。**次項で説明するように、意外とステージリハーサル行うべき事は多いので、事前にステージリハーサルで演奏する曲や、演奏する部分を決めておく事も重要です。

## ■全体の流れ

ここでは、通常のバンド(Vo×1 / E.Gt×1 / E.Ag×1 / key×1 / Ba×1 / Dr×1)のリハーサルを行う場合の説明です。

### 1、セッティングシートの提出(前日まで)

前日までに、ステージレイアウト・持ち込み楽器、その他要望を、セッティングシートに記入して、FAX・メールなどで提出してください。記入用紙は、当ホールで用意してあります。バンドごと、独自のフォーマットで準備いただいても結構です。このシートを元に、仕込みを行うと同時に、セッティングによっては、リハーサル順序を入れ替えたりします。

事前提出がない場合は、要望に添えない場合ばかりか、潤滑なリハーサルが行えなくなるため、他の出演者の迷惑にもなってしまいます。ご協力をお願いします。



### 2、現場入り・機材搬入

当日、リハーサルの予定時間までにご来店いただき、リハーサル順番になりましたら、すぐにステージの準備が行えるよう待機していただきます。事前にリハーサル予定時間は提示いたしますが、基本的には「逆リハ」と言って、**出演順と逆に行っていきます**。他の出演者のリハーサルを見たりするのも参考になりますので、時間に余裕を持ってお越しいただく事をオススメします。順番になってから、車に機材を持ちに行くなどをしていると、それだけでリハーサル時間が減ってしまいますので、ご注意ください。

当日「メンバーが仕事で、もう少し遅れそう」など、どうしても時間の都合がつかない場合は、共演者の方などをお願いして、順番を入れ替えてもらいましょう。「待っている」というのは、ぜひ避けてください。ただし、一番最初に出演するバンドが、最後にリハーサルをするという流れは、極力崩さないようにしてください。



### 3、ステージ準備

焦らず、前のバンドさんが全て撤収し、ステージが空になるまで待ってください。これは本番中の転換も同様です。**前のバンドが片付けをしている途中から、次の出演者がどんどんステージに上がってしまう事がありますが、これはマナー違反**です。また、薄暗いステージでの仕込みで、似たようなケーブルや機材が混同してしまう事を防ぎます。ましてや、楽器を倒してしまったとなると大問題です。落ち着いた転換が、結果的に、最も潤滑で安全になります。

ステージに上がってから行う準備は極力少なくなるよう、ケースやカバンから出したり、待ち時間のうちにエフェクターボードを開いて結線をし、チューニングを整えるなどしておく、実際のサウンドチェックに使える時間が増えます。



#### 4、サウンドチェック

##### ①「自分の音・セッティングの再現」

メインとも言える作業です。普段スタジオで使っているアンプと違う場合や、使い方が分からない場合は、使い方をスタッフに尋ねてください。

この時点では、細かい音量などは気にせず、さしあたり「いつもの感じ」になるよう、好きなように調整してください。細かい調整については、次の手順で確認しますので。音が出る状態になったところで、メンバーみんなで、やたらと音を出してしまうと、それぞれが自分の音を聴きづらくなってしまい、かえって調整に時間がかかってしまいます。メンバー内である程度、順序を決めておくといいと思います。

##### ②「各パートのサウンドチェック」

各自の準備が出来たら、PAオペレーターに一声かけてください。それぞれのパート・楽器が、どんな音でどんな音量で鳴らすのかを確認しながら、マイクで拾う音量などを決めていきますので、オペレーターの方から順次、指示を出させていただきます。

当ホールの順序としては、基本的に下記の通りです。(他所でも通常はこんな流れです。)

**ドラム → ベース → ギター → キーボード → (他) → ボーカル・コーラス**

各パートで、どのようなチェックをするのかは、別紙にて説明します。

##### ③「モニタースピーカーの調整」

上記までの部分で、それぞれの楽器の音量が決まったら、ここで全体演奏してもらいます。この時、モニタースピーカーの音量(通称:返し)を決めます。各演奏者が、演奏するにあたって、どの楽器の音をどれくらい必要とするのかを調整していきます。

どのパートへも、ボーカルの返しは必要とするため、当ホールではボーカルとコーラスは、全パートのモニタースピーカーに返してあるところからスタートします。この時、1曲丸々演奏するよりも、1コーラス(曲の1番だけ)などを演奏し、何が聴きづらいかを確認します。アンプを使う楽器やドラムなど、生音が直接聴こえる場合、モニターへの返しは求めない事をオススメします。

要望がある場合、「ドラムですが、ベースの音を返してください」「ギターですが、ドラム3点(バスドラ・スネア・ハイハット)を下さい」という感じで、PAオペレーターに指示を出します。それらを確認するために、再度1コーラス演奏をし、確認します。この時、全ての楽器求めすぎると、逆に聴こえていたものが聴こえなくなる事があります。**モニタースピーカーへの返しは、必要最低限が基本です！**

大事なのは、各アンプを適度な出力に抑え、ボーカルがしっかりと声を出す事で、驚くほど簡単に演奏しやすいセッティングになります。また、1曲丸々演奏する事はせず、曲の重要部分などを、モニタースピーカーの調整を兼ねて行うことにより、短時間でとても効率のいいステージリハーサルになります。本番同様のしっかりした演奏をする事も大事です。「リハなので軽めに」という人がいますが、本番でリハとバランスが全然違くと、モニターのバランスも崩れるので、本番で演奏しづらくなります。気をつけて下さい。

↓

#### ④全ての調整が終わったら・・・

この時までには PA オペレーターも、メインスピーカーからの音「通称：外音（そとおと）」のバランス調整が終わっていますので、リハーサル終了となります。

ここで、すぐに片付けてステージを降りず、その時に決めたアンプなどのツマミの目盛りをメモして(最近では携帯で撮影している人が多いです)、本番前にすぐに再現できるようにしておきます。**本番前の転換では、できるだけ音を出さない事を心がけてください。**お客さんにとって、演奏でない音は、聴いていても気持ちのいいものではありませんので^^;

一通り終わったら、アンプのツマミなどを「0」に戻し、次のバンドさんに明け渡してください。

以上が、サウンドチェック(ステージリハ)です。

#### 5、転換～本番

いよいよ本番ですが、先ほども書いたように、転換は焦らない事が潤滑な作業に繋がります。前のバンドが片づけを終え、全て捌けてからステージに入ってください。

もろもろ設定が済んだところで、軽く音を出したら OK です。転換中、延々と音を出し続け、いつ演奏が始まったのか分からないような流れはやめましょう。これは、マナー違反である以前に見苦しいので、転換中の発音は最低限にとどめましょう。その方が、見ている側の期待も高まります。

リハの再現を行う中で、気をつけていただきたいのが音量です。それまで他のバンドのステージを見て、大きな音を聴いていると、大音量に耳が音に慣れてしまい、再現したアンプの音が「ちょっと小さいかな？」と思い、大きめに設定したくなります。このような事を少しずつでも、メンバー全員がしたら、かなりの音量が増えてしまいます。そうすると、しわ寄せが来るのがボーカルです。「リハで聴こえていた自分の声の返しが聴こえない」となり、歌うどころではありません。リハの設定を信じ、メンバー同士の譲り合いを心がけましょう。

もし、本番中どうしてもモニターの音が足りなかったら、その時点で合図、もしくは曲間に支持をください。可能な範囲で対応します。本番中にモニターを求める事は悪い事ではありません。

あとは、練習の成果を発揮するだけです！

#### 6、撤収

最後の曲が終わり、照明が暗転したところで BGM が流れ始めます。そうしたら、同じく焦らずゆっくり片付けをし、忘れ物がないか確認し、次のバンドにステージを明け渡してください。

**忘れ物や紛失品がとても多いです。**自分でセッティングしたものは、自分で片付ける。借りたケーブルなどは、自分で返す。という事を徹底してください。電源アダプターやケーブルは、どれも似ているので、片付けを手伝ってもらったりする中で、どこかで混ざってしまうと、後になって見つけ出した時も「これは私のモノじゃないですか？」と言いづらくなってしまいます。

最後まで気持ちよく楽しむために、ご配慮のほどよろしくお願いします。

## ■パートごとのサウンドチェックの流れ

ここでは、前項で記したサウンドチェックにおいて、パートごとのより詳細な流れを説明します。**それぞれの楽器の音を確認するのですが、ここで共通してお願いしたいのは、単に鳴らすのではなく、自分が本番で演奏をする感覚で鳴らしてください。**また、ステージ上は人や機材で混雑します。ステッカーやテープで、自分の所有物が分かるようにしておく事を強くオススメします。

### ①ドラム

サウンドチェックは、ドラムから行います。複数の楽器の集合体であり音量が大きく、曲の中心を担う楽器だからです。その後の楽器のバランスを決める上での、基準になります。

- ・PA オペレーターからの指示で「**キック(バスドラム)を踏んで下さい**」と言われたら、ゆっくりなテンポでバスドラを鳴らして下さい。目安は、BPM60 くらいです。サスティーン(音の伸び部分)を処理したりするので、テンポは速すぎないほうがいいです。全体のバランスを決める上で、最も大事なパーツです。何度もお願いますが、**演奏する感覚で鳴らして下さい!**
- ・次にスネアです。同じく「**スネアを叩いて下さい**」と指示が来ましたら、同じくサスティーンを感じられる程度のテンポで鳴らしてください。
- ・ハイハットは少し速めのテンポで鳴らしても OK です。「チツ、チツ、チツ、シャーン」と、オープンも交えて鳴らしてください。
- ・ここまできたら、「**3 点でリズムください**」と指示があります。以上の 3 点(キック・スネア・ハイハット)で基本リズムのバランスを整えるので、演奏をしてください。
- ・つづいて、タムです。ハンガーホールでは、「**タムを順番に回してください**」と言うので、1~2 回を目安に、ハイ→ロー→フロアと叩いてください。(タムの音作りは、オペレーターによって違うので、人によっては、各タムを 1 個ずつ叩くように指示が出る場合もあります。)
- ・最後はシンバルですが、ハンガーホールでは、シンバル単独の音作りはしませんので、この時点で、セット全体で叩いてもらいます。「**セット全体でリズムを叩いて下さい**」となるので、タム回しやクラッシュ、ライドなどを交えて叩いてください。

以上で、ドラムのサウンドチェックは終了です。

なお、リハ順が 2 番目以降の場合はある程度バランスが作れているので、いきなり「3 点でください」→「セット全体でください」という流れになる事があります。

また、1 タムの場合は事前にセッティングシートに書くか、その場で指示を下さい。マイクが取り付けがあるので、勝手に外さないでください。

## ②ベース

ドラムのサウンドチェックが終わったら、次はベースです。

まずは、自分の感覚で音を作っておいて下さい。アンプのイコライザーなどは、すべてフラットな状態にし、エフェクターなどもバイパスで、どのような音が鳴るかをチェックした上で、必要な調整を加えていくことをオススメします。ライブハウスなどにあるアンプは、日々いろいろな使われ方をしているので、同じ型番であっても、鳴りが違う事が珍しくありません。プレーンな状態の音を確認する事は大事です。

注意すべき部分としては、アンプ本体からの音を大きくし過ぎない事です。ステージ上でアンプ本体が爆音で鳴ってしまうと、PA 側ではどうする事もできませんし、目の前の位置に立ったお客さんは、アンプ直接の音だけが飛びこんで来てしまいます。

本番であまりに聴きづらい場合は、演奏中ステージにおジャマし、調整いたします。

PA オペレーターから、「メインの音から下さい」と指示がありましたら、演奏中もっとも使う奏法(フィンガー or ピック or スラップ)で、エフェクターも入れた状態で鳴らして下さい。不都合があれば、「アンプの出音を絞ってください」など具体的な指示があります。続いて、別のエフェクターを使ったり、部分的にスラップをするなど、極端に音量やキャラクターが変わるものを鳴らして、オペレーターに確認させてください。

※当ホールは、機材の都合上、アンプヘッドの DI アウトを PA で拾っています。

## ③エレキギター

エレキギターは、アンプの出力調整を間違えると、ボーカルをかき消してしまい、聴きづらいものになってしまう。特に、ハンガーホールの環境では、若干小さいくらいのセッティングをお願いしています。自分で聴きづらかった場合は、モニタースピーカーに音を返しますので、アンプそのものの鳴らしすぎはご注意ください。

エレキギターは、エフェクターなどの接続が多いので、そのぶんトラブルも多いです。電源や接続ケーブルのチェックは徹底して下さい。リハでトラブルが発生すると、その解決作業だけで時間を費やしてしまいます。

さて、サウンドチェックですが、こちらメインの音から出してもらいます。極端に変わる音があったら、PA オペレーターの指示のもと、順次鳴らしていきます。

音作りのコツとしては、エフェクターの ON/OFF をしても極端に音量が変わらない事が望ましいです。ギターソロの時などは、PA オペレーター側でギターの出力を大きくするので、足元のエフェクターなどで音量を増やすような事は意識しないで大丈夫です。むしろ「ソロの時は、おまかせするので、大きめに出して下さい」という感じでオペレーターに任せてしまう方が、曲のバランスにあった音量で出力できます。

アンプの音量については、ベースの項をご参照していただき、同様の注意をお願いします。それに合わせて、歪ませすぎにも注意が必要です。音程感やストローク感がなくなってしまうと、ノイズ的に聴こえてしまうので、普段よりも歪みは抑え目でもいいかもしれません。むしろ、アンプのイコライザーを丁寧に使うことをオススメします。

#### ④エレアコ

エレアコは、DI(ダイレクトボックス)という小箱サイズの機材にシールドを差して音を拾います。DI にシールドを差し込む時、また引き抜く時は、必ず PA オペレーターさんに合図を出してください。ミキサーのチャンネルが ON の状態のまま、シールドを抜き差しすると、「バチン」ととても大きなショックノイズが発生し、機器の故障につながります。PA オペレーター側でも最大限配慮いたしますが、演奏者側でもご注意をお願いします。

エレアコは、モニタースピーカーに音が返って来ない事には、バンドの中で演奏はできないと思います。またボーカルの方がエレアコを引く場合や、弾き語りの方などは、モニタースピーカーでボーカルとエレアコの返しのバランスを十分に確認してください。サウンドチェックとしては、通常の演奏どおり弾いてもらうだけですが、エレアコ本体でイコライザーをかけて入る場合は、一旦フラットに戻してもらう場合もあります。

#### ※ピックアップやピエゾマイクのついていない通常のアコースティックギターをご使用の方。

バンド演奏においてマイクで拾う形で集音するのは、かなり厳しいものがあります。各自ピックアップやピエゾマイク(専用取付マイク)のご準備をお願いします。

#### ⑤キーボード、シンセサイザー 他ライン出力の機材

エレアコ同様に、シールドケーブルでDI(ダイレクトボックス)に接続し、集音します。なるべくPAオペレーターが接続するようにしますが、必ず差し込む時、また引く抜く時は、PA オペレーターに一声かけてください。

また、家庭練習用ピアノの機種ですと、一般的なの出力端子がついていない機種があります。事前にセッティングシートに機種名まで記入しておくとう理想的です。

#### ⑥ボーカル／コーラス

「声」は、最も小さい音の楽器ですので、モニタースピーカーの返しの調整も含め、慎重に行うことが大事です。また、マイクはどんな小さな音でも、どこまでも大きくできるわけではありません。増幅できる量は限界があり、同時に、ボーカリストには「最低限求められる声量」があります。それを下回ってしまうと、どうしても声は埋もれてしまいます。PA オペレーター側も最大限努力しますが、小さめの声の方は、がんばって声を出して下さい。

昨今、テレビなどで囁くような声で、あまいバラードを歌うシンガーを目にしますが、あのような環境・機材と、ライブハウスのステージは別物だと思って下さい。ライブハウスなどに用いられるスタンダードなマイク(SHURE SM58 など)は、大きな音量の回り込んで来る事への対策(指向性やダイナミックレンジ)が盛り込まれており、カラオケなどのマイクとは全く特性が違います。

これらのプロ仕様のマイクに慣れる事は、ステージ演奏をしていく上で、ボーカリストに求められる条件にもなってきますので、この機会にぜひ慣れて下さい。

以上、参考にしていただき、潤滑なりハーサル・本番を行ってください。

